



東弁人権賞 受賞者の横顔

「今の子どもがわからない」というのは嫌いな言葉ですね。わからなければ、子どものところに行って聞いてみればいいんです。もちろん、みんなが僕のようなことをする必要はありません。

講演でよく言っているのは、例えば夜の街中でタバコを吸っている子どもがいたら、自分の安全距離で、50メートルでも100メートルでもいいから、5分でいいので、心配だなあという目でじっと見つめて立ち止まってほしい、と。そして、「あの子たち、大丈夫かな」と周りの大人たちに声をかけてほしい、と。立ち止まる人が100人200人になって、1歩2歩と近づいていって、やがて子どもたちの傍に立てるようになったら、すばらしいと思います。

——子どもたちとのふれあいを続ける中で、うれしいことというと…。

非行や犯罪に走る子どもは、社会にいじめられ抜いていますから、すさまじい憎しみの目をしています。僕が夜間高校で非行少年たちから離れられないのは、彼らと付き合っていると、早い子では数回、長い子だと3～5年かかりますが、世の中を狂犬のような目で見ていた子どもの目が、やわらかくなるんですよ。教育に携わる者として、一番の幸せですね。

——11年間の活動を通して、薬物問題をめぐる社会情勢などは変わってきていますか。

医療関係、自助グループなど多くの仲間たちができて、そうしたところと、問題のキャッチボールがうまくできるようになりましたね。薬物の自助グループは、今、全国に35～36か所あると思いますし、薬物問題を抱えた人を診てあげようという病院も増えています。司法の側でも、弁護士さんがわれわれに相談に来てくれたり、保護監察署が自助グループの施設などを紹介してくれたり。

これまで薬物乱用対策は、特定の個人が担ってきたところがありますが、これからは、組織的に取り組むべき時代だと思います。弁護士さんや裁判官、教員、行政職員も加わった組織、公的な取り組みがほしいところです。

(聞き手：鹿野 真美)

薬物乱用防止の予防教育・啓蒙活動に取り組む

みずたに おさむ
水谷 修氏

横浜市立戸塚高校定時制教諭。生活指導を担当。深夜の繁華街パトロールを通して、子どもたちの非行・薬物汚染からの更生に取り組む。土・日や夏休みを利用するなどして授業に穴をあけることなく、年間200件近い講演をこなす。今までに行なった講演は871か所に及び、聴衆は延べ42万人を超える。

教育の本当の姿は「可能性をつくること」と語る水谷氏。薬物、非行問題を抱えた子どもたちへの思いについて話を聞いた。

——薬物問題等を抱えた子どもたちとふれあって感じることは？

僕は、覚せい剤や暴走行為をやっている子たちにやめろと言ったことはありません。やめなければいけないというのは、彼ら自身がよくわかっているのですから、無意味です。教育の本当の姿は、「おまえにはこういういいところがある。薬や暴走をやめたら、こんなことができるかもしれない」と可能性をつくることだと思います。直してほしいところがあれば、頭（言葉）で叱ったり感情（暴力）で叱ったりするのではなく、心で叱る、悲しい顔で泣くのです。「それをやられたら辛いよ。見てられないよ」と。自分自身で気づいてくれるように。

——最近は大人们が子どもを恐れている、腫れ物を触るようになっている印象がありますが。